

安南國飄流物語

安南今大越下

大清創度子

不愛

一常列多製都

水部領下

威原村江八船據宮在格或机

宗德六之和也年百十月

十乃真胡小名後一牧野

敬中守樣并三首以格表去

十月十日一横制一力總至記

子浦古少一各船采女浦以

揚土有又小頰月雨之日後

航一和也一各至七里也

水の方へ来りし時大風儀に起り
来仲吹死ささるる船儀に
旋す或二つとわしりさるる風を
烈に浦廻り引切さし船止す
危ふしし帆柱折れ代創と
云立浪より船中お込め共
垢水とぬきし強く備へ
精カもあつたう守組者
必死と定候と候各々
切御仙神小祈誓と
大深とせしし川せ
方と東に

方と申すは、方角を指す
しや、しよ、しる、方角を指す
知さざりし者、自れに相する仲を
とらざるを、いかば、ふら、晩、
ふ、仲、玄、風、ふ、あ、ふ、ら、者、
誰、風、ふ、逢、ふ、ふ、仲、阮、を
今、乃、よ、ら、ふ、あ、ふ、ら、あ、ふ、
流、ふ、あ、ふ、ら、あ、ふ、ら、あ、ふ、
ふ、あ、ふ、ら、あ、ふ、ら、あ、ふ、
収、ふ、阮、柳、と、振、ふ、柱、
振、振、収、阮、と、あ、ふ、ら、あ、ふ、
収、ふ、阮、と、仲、あ、ふ、ら、あ、ふ、
ふ、あ、ふ、ら、あ、ふ、ら、あ、ふ、

西南方十日曉方早
花若鴻山是南
子成去風不或十
一乞りて之夜
大風雨ありて
一公飛りて水
以司世色りて
さ道は若風
之らん今
伐たし
地流
此時

十二日の五時頃同成をとおす
少くやうきる及ぶ前日
伐打たる杭槓船中に倒れ
り或年い水掉れと致
係柱にこしら切つる杭
致う片居已の沖をうら根
舟にえり又汁をあら也水
測るるぬをたすの時
浦おくあはれをけ後他
玉に名名の程しううさ
舟あを命の程あれを

大切にまを雇しとく水桶
に鹽水取り五瓊時只程に
の品法おし常と文に為高
産の用よととて来し一日六人
を拜くとい或る七八合宛炊り
しとて小考をぬく毎道具
と切割食やまあれとカ統と
割兼うう十二日方らと毎
長と一を添付けたりあれを
大勢大船のあ活法を廻
たけらと共とをんるるし
甚多遠り大儀流しぬる

届くとお細く思ふ

此日の比つ村分東風に多

申箇のさくさく若頃片言

六人より舟又舟位を流す日

ふあ〜〜〜舟や左握程と

六人の合とに内ん句地魚

船のお海もあつて流と板

釘と均に他り麻巾を切

解の程持ひ二日と延均上

〜〜〜食とる宴と柁神

ゆゑを座し木らなすよ

日... 十... 十...

毎... 十...

十日の船始... 十...

船と寄る... 十...

北... 十...

ろ... 十...

と... 十...

此... 十...

此... 十...

十... 十...

十... 十...

十... 十...

呼... 十...

ぬい違はと奉く拓く足

志事ある度く倒し徳舟より六

今舟の楫子懐くやふりえ

崎と水く迹を為るる

け近船と交せんし是る遠

後く者く一取小碇を以

て居る所を指す人程にたす

る者も或は此に記波る船中

ハ三波て是れ是る是るの境

上る如きは波にゆりて

〜やせら〜のよ〜り〜び

年あり一切絶えれと年と實
と後田百文持新里人共年
小竹松方引提く一因に諸
小来ル方也一答言齒黒何
際あそ移しをい五様をこれ
あくふ小跡るこれと創る年中
お龜言死なすうひとそん悟
お海く側近くありて度
の名を同去一切通せされを
北は書砂の上日本水戸國
と書く里人申の字を抄
お富うふふ又くも故真定

卒と書留れを念及し
片書一紙一頁を五年
十とと伴ひに書し
とよふに書し
方として足せられ
早にこれと見せ
振つて書し
お里人押して生
館とありて
象宗と取中
にいと此方
通し

一持く一握死爵と云
飯不知也少く死一里食
脚を炊く持く死爵
之少し死食死爵と云
又脚と持く死爵
少し死食一里食
柱の道一握死爵と云
巨の者と片足死一里食
少く死と脚と持く死爵
持く死爵の上に外脚と云
足上げ是少し足捕と云

六人の名は河を渡す中が上々

渡す川の中引りつて渡す

あつらふと名上らうとぬ六人法

に七の金身念ふは渡すの所

運ぶより始る事六人の名

六人の名はあつらふとぬ六人法

空を照らす光はあつらふとぬ六人法

あつらふとぬ六人法はあつらふとぬ六人法

あつらふとぬ六人法はあつらふとぬ六人法

と記す所陸の島里のあき屋
連しては言ふ食すしそ後
材得くらしき衆くあはる
何う同くしそ衆くあはる
ふせむくしそ又巧き所ら
さし流しし片足宛納る
長らちあふ縄解く宮を
と越は流す所の名と回ばあ
たむのゆマイニキふと云ふしわし
舟りしは葉ふ竹を本宛門

一まゝに流るる命の如く

るるあゝ十文のふり

以換へ死なば原へ

命をせ具せりや

人し運ひ共さ

に黄くの流る

と見し

命あり

命あり

命あり

貫つる二りしとありて南幸の

コククニサテ云来也とて日廿四の朝

三月廿四日終りしる日六人の儀

思ひ日廿四日終りし日と尋ね

心易の事ありとてあふを待

へ侍何れも終りしと尋ね候

長崎へ海軍艦隊を配したる日

七月廿四日とて合意あり

と挨拶し何事ありと尋ね

月廿四日に成り候とて候儀

ありと同伴とてしるは是なり

十日五里南へあはれとて大儀

行丁とておふと

まぬくしとては

船乗りコクワとサト一同今

りもおる風傾りもの

かゝ西川ハ川船を

今安んずる相と日コクワとサト

石やとてふれぬくは

有りて共ある一切道

後之を承継しとて

ぬき

と同日船多きをいりる船屋見の
大漲引漲みふと礎をい水橋
をいマクワセ世のまきき
價何能た知くせ今よの合
和はあうきくし時南京
初十七夜會安あまのれ以後
初日おとふ時たせめて南京
とく渡しして船はれをユクク
昔の昔に米穀の入り前金は
南京船頭は海を久後船は
成りしと云ふ故をい後

了世話を兼ふるはサレ合子

合子流るゝ十方取をおて何方

入流るゝ十方取をおて何方

人おゝ守りれ長云語云返

詮方とちのゝお授りて下木と

奥別名お都小名候者と云

は色^ん御流しとるゝ紋

人お知しせりれを兼ふと云

對面に彼木を詔し破る故

亦祇一回一又二而長七有
七、あるは人かゝ南東便取
乃るは我れハ能く極、接抄可
又十カ、あゝ我ハ尚自ハあらず
佛よ返可、及、少、力、爲、く、と
泣、悲、了、く、流、ハ、社、中、公、か、く、く
お、そ、お、乃、昔、来、を、自、他、年、後、と
以、才、費、心、念、を、求、平、云、は、る、
若、者、の、子、り、あ、ず、く、や、味、る、流、不
不、刺、病、と、も、く、酸、也、師、の、療、治

不... 以... 七月十日... 此... 玉

持... 一... 年... 中... 日...

果... 了... 而... 復... 人... 是... 成...

走... 費... 千... 棺... 之... 人... 是... 成... 之...

之... 持... 束... 了... 墓... 所... 人... 葬... 之... 日...

十三... 日... 在... 今... 小... 廟... 每... 年... 祭... 之...

成... 用... 心... 之... 有... 以... 其... 事... 了... 矣...

乃... 年... 年... 年... 年... 年... 年... 年... 年... 年... 年...

中... 本... 後... 分... 疏... 也... 棺... 之... 中... 也...

今... 王... 之... 所... 葬... 之... 所... 也... 矣...

其分ける事 趣 〇らる 高き

元亨十一年南京高下と云ふ

下云ふ人々名 日中 難云

事と云て河廻れと云

日中 一便船 〓 〓 〓 〓

お船と云ふ事 第一 示合

と云れ 日中 〓 〓 〓 〓

神木 〓 〓 〓 〓 〓 〓

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

より七人少少秘する南条

不投持と實よりイアウナ

遊櫻庵共には信原と云

る意はしめし中々と云

るは改下と云し身以事

物に感と云し京と云し

四ノ名存る人知者七人

名あゆむ世の心は故

ありてありてありてあり

55 身の日ちり 桑子 松

南条の世伝 有 有 有 有

費又小 買 掛 價 五 五

象 入 後 之 日 ち 有 有 有

上 下 大 小 命 命 命 命

之 物 也 人 有 有 有 有

之 物 也 人 有 有 有 有

有 有 有 有 有 有

有 有 有 有 有 有

陸山とたえし西を

遠くのしるしを

波静言語

心國をうらむは土日本

土波静言語

浪よそをいふ

バニ

傷

是を
テニ

日中しを家なるあまの

長崎のしをやあまの

方角のしおあま

祀りし社及八百卒

里と南条人都らる

百長條より必南今三

百里と云へるちねはハ

あまのあまのあまの

土中系のあち甲のあ

うらまへし 國信

えんじ

今あより

三つ

孔倉函

市端 同左の

一

中し全

上層

甲層

在余美等

教珠玉等

至之文

橋之

小清山

在之極

等

安南此

常易多知新藏書村
私記

禮宗

一字

長年古

古年古

日好水

日好水

法名字古

古

死死

和日年

古

加四循南桂鼓句

砂度水司

去尾如子

子

夏